

## 長野県植物誌改訂調査で確認された県新産種の紹介 V

藤田 淳一\*

## 1. はじめに

3年続いた新型コロナウイルスとの付き合いも、閉塞感のあるトンネルの先に少し明かりがみえてきた気がする。2022年は、これまで通り、現地調査に加え、過去の標本の精査、特に、懸案事項をメモ書きしておいたものを重点的に見直した。今回紹介するのは、長野県での標本記録がなかったもののうち、難易度の高い推定雑種、目立たない種、近縁種に紛れて認識されづらい種を中心に紹介する。

## 2. 県新産種

以下に新産種を示す。また、図1～14に標本写真を示す。図中(1～14)の標本番号のうち、TCCNは筆者の個人番号、OAMは大町市立大町山岳博物館である。現段階で公的な機関に寄贈していない標本は追って寄贈する。なお、掲載(1)～(14)は、図1～14に対応する。

## (1) コゴメイ

*Juncus polyanthemus* Buchenau (イグサ科)

泰阜村我科の天竜川沿いにて生育を確認した。オーストラリア原産の高さ1mを超える大型のイグサ。2021年小例会(試行)(本誌55号にて報告)において生育を確認したが、果実がなかったため、2022年に再訪し、標本を採集した。本種は、大河川の下流部や沿海地で群生しているが、長野県内での生育の確認は初めてである。茎を縦に切断すると髄がはしご状に空洞になっていて、髄が一樣に詰まるイグサとは異なる。*Juncus*に関して、コゴメイ以外に大型の外來系統と思われるものが県内各地で見られるようになっており、詳細を調べなければならないと考えている。

## (2) ニイタカスゲ×ノゲヌカスゲ

*Carex leucochlora* Bunge var. *aphanandra* (Franch. et Sav.) T.Koyama × *C. mitrata* Franch. var. *aristata* Ohwi (カヤツリグサ科)

茅野市米沢のミズナラ・コナラ混交林縁におい

て生育を確認した。ニイタカスゲ *C. leucochlora* Bunge var. *aphanandra* (Franch. et Sav.) T.Koyama とノゲヌカスゲ *C. mitrata* Franch. var. *aristata* Ohwi の推定雑種である。現地では、花序枝の苞葉が長く、基部の鞘が濃褐色でほとんど細裂せず、光沢があることから、ノゲヌカスゲと考えた。さらに細部をみていくと、花序枝が斜開から平開する点、雌鱗片の芒が短いものが交じる点、花序の基部に雌小穂をつける点、葉の幅が広く、弓なりに湾曲して斜開から平開する点などニイタカスゲの特徴もみられた。また、雌鱗片の芒が長いもの(ノゲヌカスゲの特徴)と、芒が短いもの(ニイタカスゲの特徴)が混在することも併せて、ニイタカスゲとノゲヌカスゲの雑種と推定した。標本にした個体は開花後、果期前に採集しており、稔性の有無は不明である。

## (3) サトヤマハリスゲ

*Carex ruralis* J.Oda et Nagam. (カヤツリグサ科)

南木曾町読書の滲出由来の小水路脇において生育を確認した。確認時には、雌小穂開出前の未熟な状態であった。当初、ハリガネスゲ *C. capillacea* Boott var. *capillacea* の出始めと考えたものの、全体に小型で貧弱な印象を受けたため、メモ書きを残しつつ標本を採集しておいた。県内では比較的温暖な木曽地方南部とはいえ、4月に出穂し始めるのは花期が早すぎることから、細部を確認したところ、果胞の口部に明確に2歯が認められ、全草が小さく、ほっそりしていること等からサトヤマハリスゲと確認できた。これまで県南部でハリガネスゲとして認識しているものの中に本種が含まれている可能性がある。

## (4) ツクバトリカブト×ハクバブシ

*Aconitum japonicum* Thunb. subsp. *maritimum* (Tamura et Namba) Kadota × *A. zigzag* H.Lev. et Vaniot subsp. *kishidai* (Nakai) Kadota (キンポウゲ科)

山ノ内町平穏のススキ草地において生育を確認した。ツクバトリカブト *A. japonicum* Thunb. subsp. *maritimum* (Tamura et Namba) Kadota とハクバブシ *A. zigzag* H.Lev. et Vaniot subsp. *kishidai* (Nakai) Kadota の推定雑種である。茎葉の切れ込みの深さ

\* 藤田 淳一 長野県松本市  
aegithalos-caudatus@celery.ocn.ne.jp

や葉柄、花柄に屈毛が出ることからツクバトリカブトのように思えたが、花序の寸詰まった様子に違和感を抱いた。そして、花卉の距、分布域から、ハクバブシが関与した雑種であると推定した。後日、標本を見直すと、自分の同定に不安を覚え、形態細部をみて、全体の雰囲気を変互にみればみるほど、別の組み合わせの雑種にもみえはじめる状態となった。山ノ内町に隣接した群馬県側にも同様の環境があるため、群馬県の場合はどうなのだろうと、群馬県立自然史博物館の大森威宏氏に懸案の標本各部の写真を送りしつつ意見を伺った。その結果、山地性のツクバトリカブトと亜高山性のハクバブシの雑種であろうとの結論に落ち着いた。Aconitum は、いくらでも交雑する可能性があることや、頭の中で形態細部の特徴と全体の雰囲気のバランスを取ることの難しさを再認識させられた。

#### (5) マルバハギ×ビッチュウヤマハギ

*Lespedeza cyrtobotrya* Miq. × *L. thunbergii* (DC.) Nakai subsp. *thunbergii* f. *angustifolia* (Nakai) Ohwi (マメ科)

木祖村大字小木曾の吹付法面において生育を確認した。マルバハギ *L. cyrtobotrya* Miq. と「ニシキハギ」と呼ばれるビッチュウヤマハギ *L. thunbergii* (DC.) Nakai subsp. *thunbergii* f. *angustifolia* (Nakai) Ohwi の推定雑種である。吹付由来のビッチュウヤマハギと周辺に自生していたマルバハギが交雑したものと考えられる。花がマルバハギに比べて大きく、成熟した小葉の表面に微毛が宿存するビッチュウヤマハギの特徴と、花序枝が葉よりも短いマルバハギの特徴を併せ持つ。本推定雑種は、山間部の吹付法面周辺で稀にみられる。

#### (6) オクシモハギ

*Lespedeza davidii* French. (マメ科)

南木曾町大野正兼の道路脇の崩壊地において生育を確認した。本種は、中国原産で、花や小葉が特に大きく、茎に稜が明確に数条発達することで他種からは容易に識別できる。2000年代、県内各地で吹付斜面への緑化植物としてさかんに使用され、周辺への逸出もよくみかけた。その後、徐々に減少したのか、現在ではみかけるのが稀になった。山間部では、本種と周辺に自生する *Lespedeza* の雑種をみることがあり、かつて周辺に本種が生育していた痕跡を認めることができる。

#### (7) ツクシハギ×ケハギ

*Lespedeza homoloba* Nakai × *L. thunbergii* (DC.) Nakai subsp. *patens* (Nakai) H. Ohashi (マメ科)

小谷村大字中土の河川沿いの砂礫地において生育を確認した。ツクシハギ *L. homoloba* Nakai とケハギ *L. thunbergii* (DC.) Nakai subsp. *patens* (Nakai) H. Ohashi の推定雑種である。一見すると、ケハギに酷似しており、成熟した小葉の表面に微毛が密生し、茎にも毛が密生するが、ところどころ小葉の先端が凹み、萼裂片が短く尖るツクシハギの特徴が同時にみられる。ケハギは、日本海側豪雪地の雪崩草地に生育する種であり、県内分布は北部のみである。一方、ツクシハギは、全県に普通に生育する。ケハギの分布による制約により、本推定雑種の分布は県北部のみと考えられる。

#### (8) ヒメキンミズヒキ×オオキンミズヒキ

*Agrimonia nipponica* Koidz. × *A. noguchii* Seriz. (バラ科)

信濃町大字富濃のミズナラ林縁において生育を確認した。ヒメキンミズヒキ *A. nipponica* Koidz. とオオキンミズヒキ *A. noguchii* Seriz. の推定雑種である。茎葉は基本的に5小葉であるが、頂小葉3枚に比べて側小葉2枚が極端に小さく、花が小さい点がヒメキンミズヒキの特徴を引き継いでいる。一方、草丈が1.3mを超え、全草多毛で、托葉が大きく、茎葉表面が青みを帯びた緑色になる点でオオキンミズヒキの特徴も兼ね備える。花序下部の古い花の子房が膨らんでいないため、不稔と考えられる。

#### (9) ハイニシキソウ

*Euphorbia prostrata* Aiton (トウダイグサ科)

松本市野溝の道路脇のコンクリートの隙間において生育を確認した。本種は、千曲市版レッドデータブック（千曲市版レッドデータブック作成委員会監修、2011）全種目録に掲載されているものの、標本の明記がないことや、県内各地の市街地で急増しているため、敢えてここで挙げておく。果実の稜上のみには軟毛が生え、丸みを帯びた茎葉に斑が入らず、茎は完全に地面を匍匐し、同心円状に広がっていく。よく似たアレチニシキソウ *E. sp. aff. prostrata* Aiton も市街地で急増しており、ハイニシキソウからは、葉裏に毛があり、茎が匍匐ながらも斜上する点で識別できる。市街地に生育する外来の *Euphorbia* は気づかれぬまま種数が増えている可能性があり、既存の記録にとらわれることなく、市街地を中心に丹

念に探索していく必要がある。

#### (10) シダレシロヤナギ (新称)

*Salix dolichostyla* Seemen subsp. *dolichostyla* f. (ヤナギ科)

松本市波田の河川敷において生育を確認した。シロヤナギ *S. dolichostyla* Seemen subsp. *dolichostyla* の枝がしだれる型で、品種以下の学名は未定である。亜種関係コゴメヤナギ subsp. *serissifolia* (Kimura) H. Ohashi et H. Nakai の枝がしだれるものには、シダレコゴメヤナギ f. *pendula* (Okuhara) H. Ohashi et H. Nakai という品種が記載されている。県内において、シロヤナギとコゴメヤナギには形態的に移行型が多く、さらにシロヤナギも品種レベルまで細分化すると複雑になることが懸念されるが、まずは県内にどのような型が存在しているのか例示する段階として挙げておきたい。

#### (11) ホソバジャニンジン

*Cardamine impatiens* L. var. *tenuissima* Honda (アブラナ科)

松本市安曇野林道沿いの湿った砂礫地で生育を確認した。本種はジャニンジン *C. impatiens* L. var. *impatiens* の変種であるが、従来は熊本県、宮崎県の石灰岩地に固有とされていた。毎年冬季に開催している中部北陸勉強会において、新潟大学の志賀隆氏により、本州にも分布することが示された。近年自分が採集した標本を検討したところ、安曇野市、池田町等で採集していた。ホソバジャニンジンは、ジャニンジンに比べて全草に対する花序が相対的に大きく、茎葉は茎の下部に集まって付く傾向にある。また、自分の採集した標本の中には、ホソバジャニンジンと狭義ジャニンジンとの移行型のような特徴を有するものも確認している。

#### (12) ウスベニツメクサ

*Spergularia rubra* (L.) J. et C. Presl (ナデシコ科)

長野県松本市大字笹賀の未舗装路において確認した。北半球に広く帰化する外来種である。海岸沿いに定着することが多いが、内陸の市街地の人通りの多い裸地や河川敷に時々群生している。ちょうど海岸性のハマツメクサ *Sagina maxima* A. Gray が内陸に人知れず生育している状況に似ている。県内でも時々生育しているのを目撃してきたが、近縁種のウシオハナツメクサ *Spergularia bocconeii* (Scheele) Graebn. との違いを確認して同定するのが面倒とい

うだけの怠け心が記録を残そうという意志を削いでいた。調べる手間を惜しまず、足元の小さな植物にまで丁寧な視線を向けることが重要であるということを、本種をみかける度に思い出しながら、毎回素通りをしてきた自分への戒めとして今回提示する。

#### (13) アラゲコバノミツバツツジ

*Rhododendron reticulatum* D. Don ex G. Don subsp. *ciliatum* (Nakai) Minamitani (ツツジ科)

大桑村大字野尻のアカマツ林縁において生育を確認した。関西地方のコバノミツバツツジを亜種コバノミツバツツジ subsp. *reticulatum*、関西を除く広域に分布するものを亜種アラゲコバノミツバツツジ subsp. *ciliatum* (Nakai) Minamitani とされた(南谷ら、2018)。つまり、従来県内でコバノミツバツツジと呼ばれていたものが、組み換えにより亜種アラゲコバノミツバツツジとされたのである。そのため、新産と呼ぶにはふさわしくないが、他地域との特徴の違いもあるため、ここで挙げておく。筆者は、以前から、関西地方で普通に生育するコバノミツバツツジは、葉の表面に光沢があり、葉が菱形になり、他のミツバツツジ類とは容易に識別できるものの、長野県内のコバノミツバツツジは、葉の表面に光沢がなく、葉の形が丸みを帯びた三角形となり、他のミツバツツジ類と細部をみなければ識別はできないと考えていた。この違いについてあまり深く考えることなく、他種との交雑の影響だろうと、やり過ぎてきた。南谷らは、花柱が有毛のものを狭義アラゲミツバツツジ(ナギソミツバツツジ) var. *ciliatum* Nakai f. *trichostylum* M. Mizush. として挙げているものの、これは、安定しない変異であるため、細分化すべきではないとの立場をとっている(南谷ら、2019)。実際に本稿で引用した標本(TCCN16-0021)は、花柱に開出毛のある狭義アラゲミツバツツジ(ナギソミツバツツジ)、同所的に混生していた他個体から採集した標本(TCCN16-0020)は、花柱に開出毛のないアラゲミツバツツジであった。狭義アラゲミツバツツジ(ナギソミツバツツジ)の採用の是非は、植物誌のツツジ科執筆者の方にお任せしようと思う。

#### (14) オオロベリアソウ

*Lobelia siphilitica* L. (キキョウ科)

長野県長野市戸隠のススキ草地内の湿地において生育を確認した。花卉の青みの強い部位と白い部位のコントラストが美しい外来種である。湿地内に



は、アブラガヤ *Scirpus wichurae* Boeck. f. *concolor* (Maxim.) Ohwi、アカバナ *Epilobium pyrricholophum* Franch. et Sav. が群生する湿地の広範囲に点々と生育しているため、花色の淡いサワギキョウ *Lobelia sessilifolia* Lamb. が点在しているようにみえた。サワギキョウよりも葉の幅が広く、花卉の下唇が小さいことで識別できる。近年、湿生の外来種、特に食虫植物を湿地に植える活動が全国で同時多発的に起きていると聞く。このオオロベリアソウの由来は不明であるが、鮮やかで美しい湿生植物だからこそ、外来種排斥運動の標的になるような場所には生育してはならず、花壇の中でその姿を堪能したいものである。

### (15) タイアザミ×モリアザミ

*Cirsium comosum* (Franch. et Sav.) Matsum. × *C. dipsacolepis* (Maxim.) Matsum. (キク科)

本祖村大字小木曾の道路脇のススキ草地縁で生育を確認した。タイアザミ *C. comosum* (Franch. et Sav.) Matsum. とモリアザミ *C. dipsacolepis* (Maxim.) Matsum. の推定雑種である。形態的には、タイアザミに酷似するが、頭花の総苞片の質が厚く、幅広で、茎葉の羽状に短く分岐し、茎葉中脈・側脈が太い様子や、生時、葉の色が明るく、質がみずみずしく厚いなど、モリアザミの特徴を有している。*Cirsium* は種間雑種と考えられるものがありふれており、枚挙に暇がない。その中でもタイアザミとモリアザミの推定雑種は比較的わかりやすいものであるため、今回提示した。

### 3. おわりに

今回は、難易度の高い推定雑種を中心に取り上げた。図鑑に載っている検索表を引けばどこかの種に到達する。それを無批判に受け入れて処理するのではなく、該当する種の記述に違和感を覚え、一度調べたものを後日見直して、再検討していくのは重要と考える。市街地のコンクリートの隙間に生育する小さな外来種であっても、既存の知識、リストなどに当てはめるのではなく、自分なりに 1 から調べるようにするとそこに発見が潜んでいるような気がする。2023 年も引き続き自分の採集した標本の見直しをしながら、足元に眠る情報を拾い続けようと思う。

謝辞

群馬県立自然史博物館の大森威宏氏には、トリカブトの雑種の同定にあたり、有用な情報、助言を頂きました。新潟大学の志賀隆氏には、ホソバジャニンジンに関する情報を提供頂きました。大町市立大町山岳博物館 (OAM) の標本登録にあたっては、千葉悟志氏にお世話になりました。ここに記して御礼申し上げます。

### 引用・参考文献

- 千曲市版レッドデータブック作成委員会：監修  
(2011) 千曲市版レッドデータブック  
橋戸勝也 (1997) 長野県植物誌 キンボウゲ科トリカブト属. 327-336pp. 信濃毎日新聞社, 長野  
門田裕一 (2016) 改訂新版 日本の野生植物 2 キンボウゲ科トリカブト属. 120-131pp. 平凡社, 東京  
門田裕一 (2017) 改訂新版 日本の野生植物 5 キク科アザミ属. 216-254pp. 平凡社, 東京  
勝山輝男 (1993) 日本産アオスゲ類の再検討. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), 22:53-67  
勝山輝男 (2015) 日本のスゲ 増補改訂, 山と溪谷社, 東京  
三河の植物観察 (<https://mikawanoyasou.org/>)  
(2022 年 9 月 4 日閲覧)  
南谷忠志・門田裕一・米倉浩司 (2018) 日本産ミツバツツジ類 (ツツジ科) の分類 (1). 植物研究雑誌 93(2):75-103  
南谷忠志・門田裕一・米倉浩司 (2019) 日本産ミツバツツジ類 (ツツジ科) の分類 (2). 植物研究雑誌 94(4):195-241  
宮本太 (2015) 改訂新版 日本の野生植物 1 イグサ科イグサ属. 287-292pp. 平凡社, 東京  
Oda J., Nagamasu H. (2008) Two New Species of *Carex* sect. *Capitellatae* (Cyperaceae) from Japan, *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica*, 59(1):55-66  
Ohashi H., Nakai H. (2006) *Salix dolichostyla* Seemen, a Correct Name for *S. jessoensis* Seemen (Salicaceae), *Journal of Japanese Botany*, 81: 91-97  
大橋広好 (2016) 改訂新版 日本の野生植物 2 マメ科萩属. 176-281pp. 平凡社, 東京  
大塚孝一・星山耕一・藤田淳一・尾関雅章・石田祐子 (2017) 長野県植物目録, 長野県植物目録

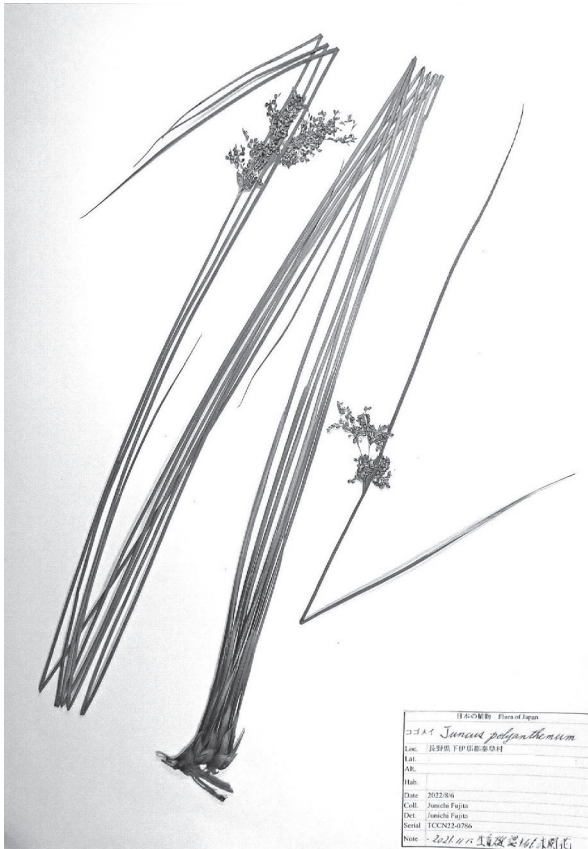


図1 コゴメ（長野県下伊那郡泰阜村我科：  
TCCN22-0786：2022年8月6日）

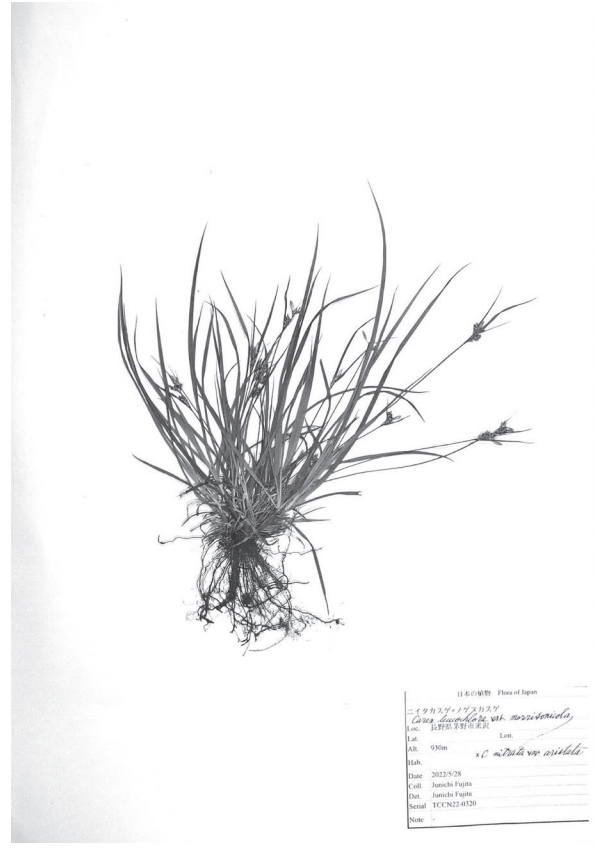


図2 ニイタカスゲ x ノゲムカスゲ（長野県茅野市  
米沢：TCCN22-320：2022年5月28日）



図3 サトヤマハリスゲ（長野県南木曽町読書：  
TCCN16-0023：2016年4月17日）

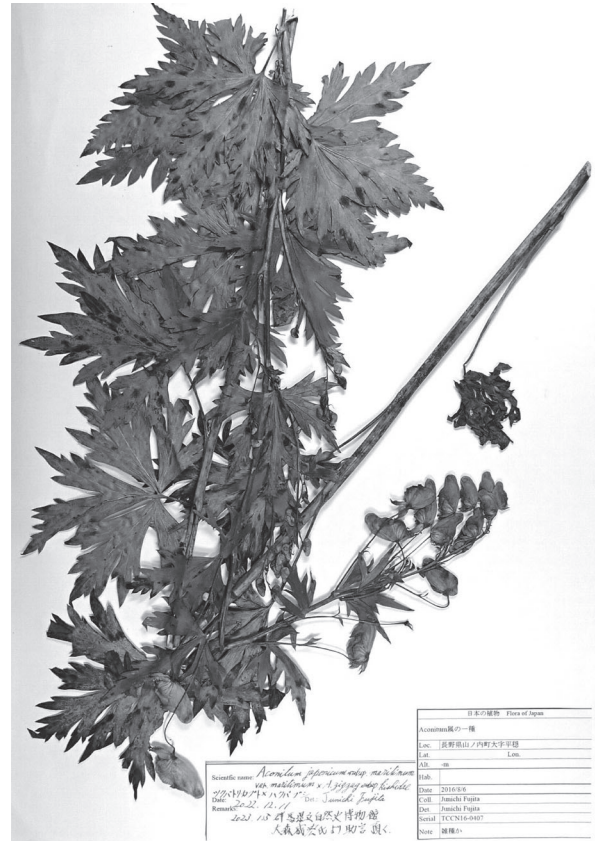


図4 ツクバトリカブト x ハクバシ（長野県山ノ内  
町平穏：TCCN16-0407：2016年8月6日）



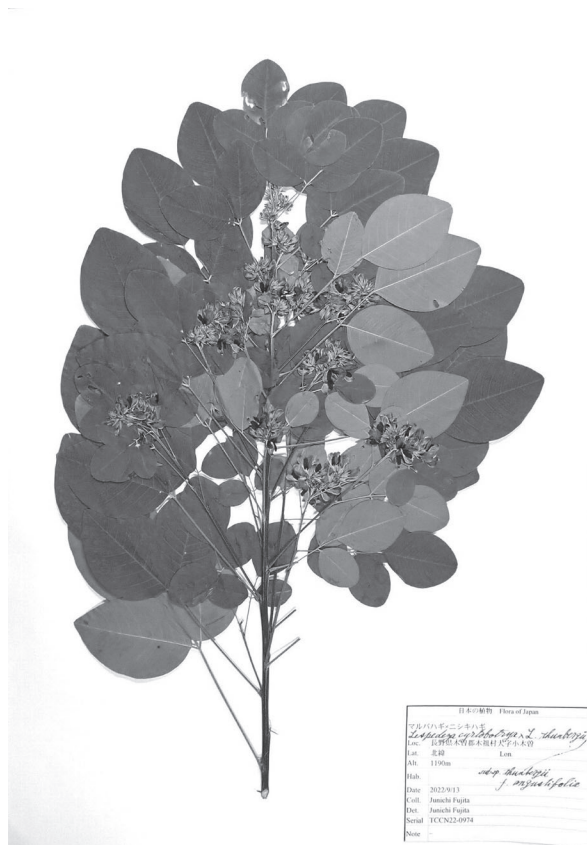


図5 マルバハギ×ビッチュウヤマハギ（長野県木曾郡木祖村大字小木曽：TCCN22-0974：2022年9月13日）



図6 オクシモハギ（長野県南木曾町大野正兼：OAM12351/TCCN14-0161：2014年11月3日）



図7 ツクシハギ×ケハギ（長野県北安曇郡小谷村大字中土：OAM12957/TCCN22-0902：2022年9月3日）



図8 ヒメキンミズヒキ×オオキンミズヒキ（長野県下上水内郡信濃町大字富濃：TCCN22-0917：2022年9月3日）

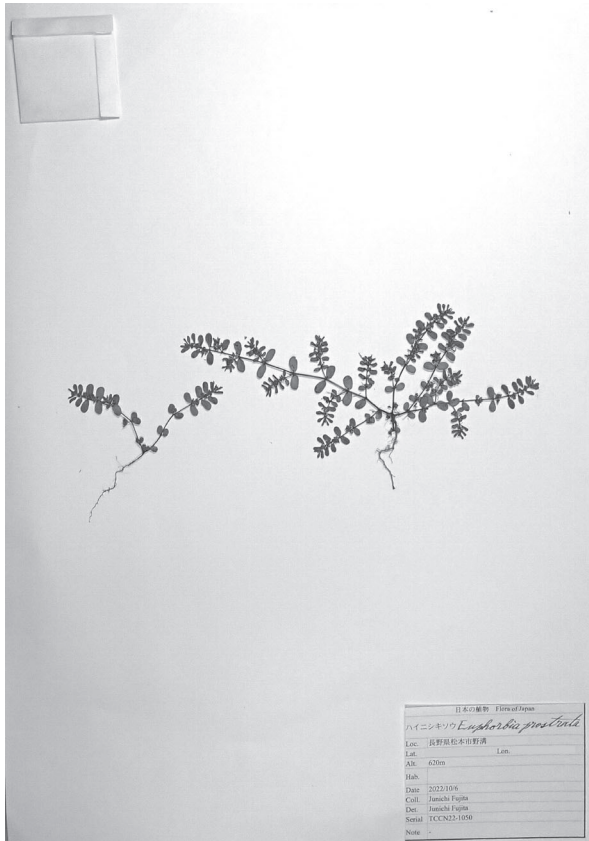


図9 ハイニシキソウ（長野県松本市野溝：TCCN22-1050：2022年10月6日）



図10 シダレシロヤナギ（長野県松本市波田：TCCN22-0127：2022年4月24日）



図11 ホソバジャニンジン（長野県松本市安曇：TCCN22-0273：2022年5月15日）

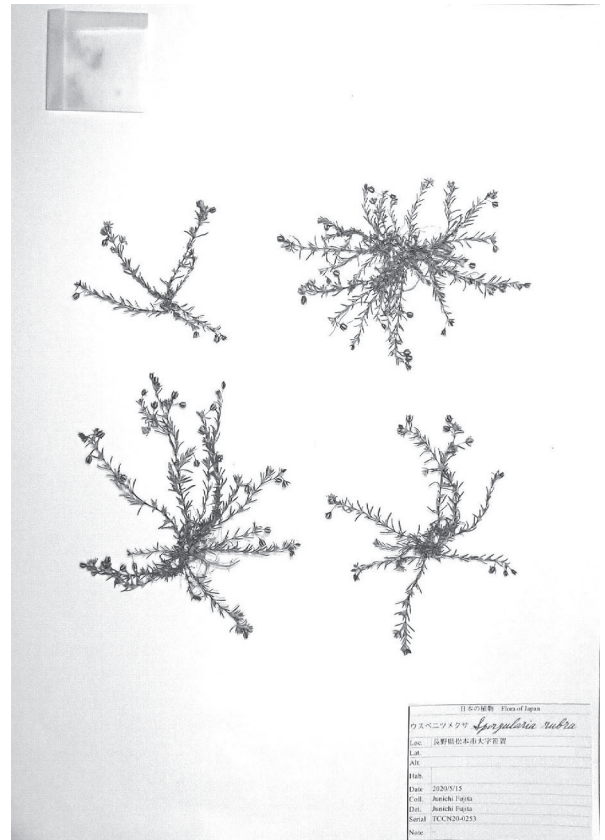


図12 ウスベニツメクサ（長野県松本市大字笹賀：TCCN20-0253：2020年5月15日）





図 13 アラゲコバノミツバツジ (長野県大桑村大字野尻: TCCN16-0021: 2016 年 4 月 17 日)



図 14 オオロベリアソウ (長野県長野市戸隠: TCCN22-0913: 2022 年 9 月 3 日)

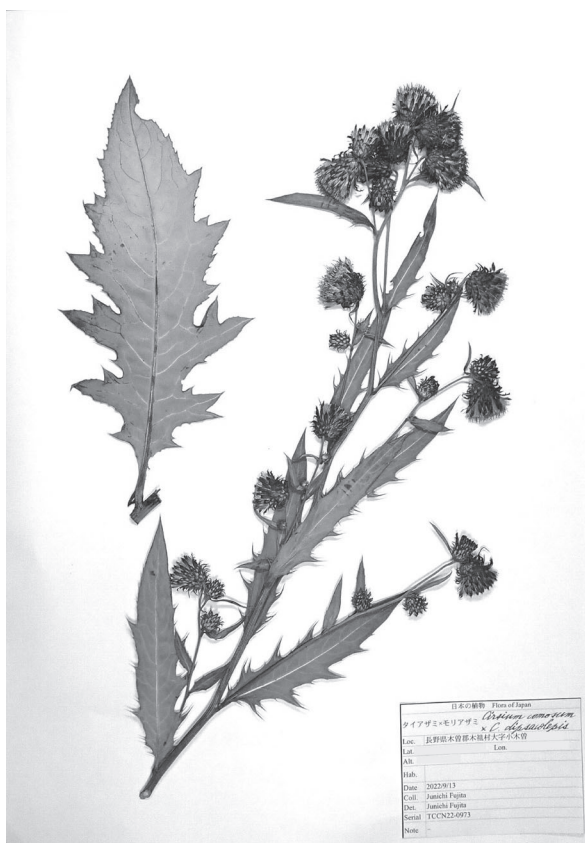


図 15 タイアザミ×モリアザミ (長野県木曾郡木祖村大字小木曾: TCCN22-0973: 2022 年 9 月 13 日)

#### 編纂委員会

芹沢俊介 (2008) キンミズヒキの再検討 (2) 分類学的考察. シデコブシ (Shidekobushi), 1:37-44  
 清水矩宏・森田弘彦・広田伸七 (2001) 日本帰化植物写真図鑑. 全国農村教育協会, 東京  
 杉本順一 (1965) 日本草本植物総検索誌<双子葉編>. 六月社, 大阪  
 植村 修二・清水 矩宏・水田 光雄・森田 弘彦・勝山 輝男 (2010) 日本帰化植物写真図鑑 第2巻. 全国農村教育協会, 東京  
 米倉浩司・梶田 忠 (2003-) 「BG Plants 和名一学名インデックス」 (Ylist, <http://ylist.info>) (2023 年 12 月 18 日閲覧)